那賀川 倶楽部

volume 11

平成17年11月13日発行
［毎月第2日曜日］

編集・発行 国土交通省四国地方整備局 那賀川河川事務所 http://www.skr.mlit.go.jp/nakagawa/
〒774-0011 徳島県阿南市領家町室の内390 TEL（0884）22-6461 FAX（0884）22-7062（調査課直通）

▲1999年(平成11)にとりはずされた相生町川浦の吊舟（画：宮武 舜彦）

那賀川「今昔」物語

谷間の空を渡る吊舟

かつて、那賀町（旧上那賀町・旧相生町）の深い谷間には、空に浮かぶ舟がありました。

急流で舟が渡れず、橋も架けられず、山道を遠回りして遠くの渡し場まで通っていた人々にとって、それはまさに天恵といえるものでした。人々は目を見張り、歓喜して、その舟を吊舟と呼びました。

吊舟は、両岸に渡したワイヤーロープに滑車のついた木箱を吊り、その中に乗って綱を引く手動のロープウェイでした。

吊舟は谷間の暮らしに活気をもたらしました。郵便屋さんも乗りました。定員は三名ほどですが、時には子牛も乗ってきました。そして吊舟は、対岸の学校に通う子供たちの大きな楽しみでした。ちょうど今頃は、紅葉と蒼天の中、そのままで一幅の絵となりました。

その後、自転車のようにペダルでこぐ吊舟や鉄製のゴンドラも現れましたが、昭和三〇年代にコンクリートの長大橋が登場してくるとともに、吊舟は谷間の空から消えていきました。

明治末年に出現し、谷間の人々の胸を躍らせた吊舟も、今は昔の話です。

水と闘った男たち

三角州を辰巳新田に変えた 井上甚右衛門

江戸時代後期、耕作不能の地であった那賀川河口の三角州に、初めて開発の手を入れたのが、横見村（阿南市）の無役人、新兵衛でした。

しかし、広大な低湿地のため、開発はたちまち資金難に陥りました。

この窮地を救い、以後、新田開発を一手に引き受けたのが小松島の豪商、第七代井上甚右衛門です。

那賀川河口の新田開発には塩害、洪水、用水難等の難問が待ち受けていました。

甚右衛門は、数千艘に及ぶ捨石で州の回りを固め、湿地に土地を盛り、井戸を掘り、ため池を設け、入植者を募り、一八四〇年（天保一一）には約一六町の田畑を開きました。

この新田は、徳島城の辰巳（東南）に当たることから、辰巳新田と名づけられました。

甚右衛門の壮大な土木事業は、天保の飢饉で困窮していた人々を救済する社会事業としての役割も果しました。

その後、洪水や地震、津波等による堤防決壊で田畑は大災害にあったにもかかわらず、新田開発は甚右衛門の子孫に受け継がれ、一八六一年（文久一）には約四九町、一八七六年（明治九）の地租改正前には約六〇町にまで達しました。

しかし、時代の変転の中で、辰巳新田は工業団地に変貌しました。それは井上甚右衛門にとって想像もできないことであったに違いありません。

那賀川の民話……那賀町（旧木頭村）

平家の皿泉

野久保山の頂上近くに皿泉という泉があります。

源平の戦いに敗れた平家の一族が、ここで戦いに備えて稽古をしていましたが、山頂近くで水が少なく、落人の大将は、祈りの心得のある家来に命じて、水を湧き出させることにしました。

家来は、皿の形の穴を掘り、金の皿（金色の磁器）七枚を埋め、一心に祈りました。すると、祈りは天に通じ、水が湧き、泉となりました。それでこの泉を「平家の皿泉」あるいは「平家の行い水」とも言うのだそうです。

泉に埋めてある皿は、そこで使ってもいいが、持ち帰ると腹痛を起こすと言い伝えられています。

なお、この付近には鎧・かぶとが埋まっているとも言われていますが、定かではありません。

水の文化誌

『川掘り』

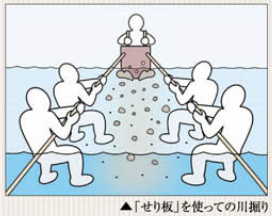
那賀川で筏流しによる木材輸送が盛んに行われていた頃のこと。

那賀川は、洪水の度に流れが変化し、時には砂利や石で筏の通路が塞がれることがありました。

そこで出動するのが「川掘り」と呼ばれた人たちでした。

「じょれん（土や砂利を掻く道具）」や「せり板」に縄を二本つけ、一人が川に突き立て、他の数人が左右に分かれて引いたり、熊手で石を掻いたり、水が少ない場合には川に入って手で除けたりしました。

水先を見る技術を必要とした「川掘り」も筏流しが那賀川から消えると共にその使命を終えました。



▲「せり板」を使っての川掘り

地名の由来

平（たいら）

【那賀町(旧木頭村)】

平といえば、誰でも平坦な地形を思い浮かべますが、事実は逆。那賀川源流域にある平は、高の瀬峡の景勝地として知られる山峡の地にあります。

地名には、長い時の流れの中で、文字や読み方が変化していくものがありますが、平もその一つです。「ひら」は「崖」を意味する古語で、つまり、山峡の急な傾斜地ということです。この「ひら」に、平の文字が当てられ、いつしか「たいら」と呼ばれるようになったと考えられています。

なお、平には平家落人伝説が残されていますが、地名とは関わりがないとされています。

R100 SOY INK
このパンフレットは印刷業界に配慮して、再生紙に大豆油インキを使用しています。